

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和七年七月作品集

里山暮らし あざみ

朝は、鳥の囀りて目覚め、眼下に見える島から昇る朝日は、島々を赤く染めます。夕暮には、裏山に沈む夕日、夜は、コンビナートの灯が不夜城の様に見える。龍りがちの私には、不自由なこともあります。鳥や蝶、庭に四季折々に咲く花を眺めます。また、裏の畑から届く新鮮な野菜や果物、隣家からは、おはぎ、稲荷ずしなどが届き、古い時代の習わしが今も残り、人情も厚い、そんな暮しです。里山の自然の怖さもありますが、学ぶこともたくさんあります。

裏畑に人の声して日脚伸ぶ

朝市へ桃の花積み一輪車

花蜜柑匂ふ畑に立ち止まる

朝焼に染まれる瀬戸の小島かな

大樟の根方にありて梅雨茸

梅雨の蝶隣の屋根を越えて来し

日の暮るるほどに浮き立つ山法師

裏畑の崖に靡いて青薄

海見ゆる軒に風鈴鳴りにけり

盆提灯掛け連ねたる仏間かな

《作品鑑賞》 綾乃

里山での丁寧な暮らしを、時には大胆に、時にはシャープに切り取り詠まれているあざみさん。今回は、春を感じるころから、盛夏、初秋へと移り変わる瑞々しい時期の里山を五感で楽しめるような御句の数々に、思わず惹き込まれてゆきました。

朝焼に染まれる瀬戸の小島かな

昨年世界一美しい美術館に選ばれ、私が大好きな下瀬美術館のお近くかと思えます。向かいに巖島、さらに瀬戸の小島という多島美をいつでも眺められる贅沢。朝焼はどんなに美しいことでしょうか。

日の暮るるほどに浮き立つ山法師

白く沢山の花をつける山法師は昼間も目を引き爽やかですが、日の暮れたときの様子を詠まれたところが秀逸と思いました。山法師の名は、一説によると白い頭巾をかぶった比叡山延暦寺の法師姿からつけられたとも。さわさわと山に気配が感じられるような御句でもあります。

海見ゆる軒に風鈴鳴りにけり

朝焼の海、眩しく海面が乱反射する昼間から夕暮れてゆき、コンビナートが湾に沿って輝きだす。どの時間帯の海の風鈴を詠まれたのかは定かではありませんが、素敵な軒下の涼やかな暮らしであることは間違いないと、しつかりと切れのある御句には、里山や海に音がしかと響き渡るような強さも感じられました。

里山を守る必要性について叫ばれているこの頃ですが、まずはあざみさんのように身近に、細やかに自然を見つめ、愛着をもつことが大切であると気づかせて頂きました。

桑の実を口に見てゐる夜見嶋

夏の草どの円墳も覆ひけり

景桜の蔭に振り向く墳丘墓

夏の日のあまねく差せる礎石かな

金堂へ日傘をひらき歩きけり

古墳見て廢寺跡見て清水汲む

国府から神奈備山へ南風吹く

大山も烏ヶ山も夏夕べ

いろいろな紫陽花並べ根雨の夕

ほうたるを見たくて根雨を歩きけり

佐保光俊

夏曉の川の静かに流れけり

梅雨さざす鳥も草木も静まりて

木天蓼の花へと雨の止まぬなり

七月の風吾が髪を吹き通せ

白南風に揺れに揺れたり大桜

短夜の本一冊に明けにけり

夏曉や人の連れきし犬を撫で

朝空に鴉よく鳴く梅雨の明け

白南風に潮の香りのありにけり

風鈴の短冊ゆらし秋を待つ

高尾ひとみ

風の来て未央柳を揺らしけり

とりどりのあざさる咲いて独りの居

青葉風そろそろ歩く坂の道

風吹いて窓に近づく黒揚羽

子の遊ぶ傍の噴水高まりぬ

山の端に大夕焼や鳥帰る

夏の雨友に電話や人恋し

洗ひ髪して谷風に親しめり

夏の月海に映りてゆらゆらと

散るときは傍に明るき大花火

あざみ

一青に閑きさうなるクレマチス

手を入れて次々と折る鉄線花

緑さすバツハを聴きに教会へ

梅雨墨鴉羽ばたく音のして

川べりに鳩の集まる梅雨晴間

ビルの間にドクタイエロ―梅雨あがる

六月や診察室に金魚の絵

冷蔵庫輪ゴムの束に一つ足し

麦飯の炊き上がり待つ夕べかな

書き物をせし机拭き冷し中華

亞矢

揚羽蝶もつれ合ひては光りをり

ひと気なき緑雨のなかの浮御堂

牡蠣殻の匂つてゐるたる海開き

水球の吾子の疲れて大人びる

端然と吾子の干したり水球帽

後輩が新婚となる涼しさよ

外勤の冷し珈琲ぬちぐすい

水馬やほどよく水面分け合うて

清らかに我が身潤ふメロンかな

立ち漕ぎの少年大きな夏帽子

綾乃

帰り来る我に黄の薔薇匂ひけり

紅薔薇の久しく咲いて散り始む

岩滝山はいつも近くや青時雨

雨に日に青葉濃くなる御山かな

一本に群れて止まらぬ夏の蝶

糸引いて木蔭に揺るる毛虫かな

五月雨るる彼岸止場を船の出で行けり

宴果ててかそけく光る梅雨の月

金山を傷き立たせたる青嵐

川風に堰の水音聞きし夏

井藤希

勤務終へ車窓に見たる夏の瀬戸

花みかんお遍路道の光にあり

山桃の庭に熟れたる生家かな

山桃の土佐の山路に実る頃

六月の花火のやうにアガパンサス

梅雨明や五重塔は屋根を青き

山間の里あちこちに令歎の花

磯釣の父に連れられ夏の浜

浜木綿を土佐への車から眺め

煮花果を二つに割つて夫と食ふ

草茂り水音のみの岐れ道

峡の子の手に載せて来る井守かな

梅雨明けて納屋の板戸を外しけり

川底の小石の光る夏越かな

山裾ははやも日かげる青田道

片蔭の長きを行きて遠回り

深閑と峡を満たして夏の月

夏の花とりどり咲かせ路地に住む

打ち水の路地を爪立ち女学生

風鈴のよく鳴る夕の留守居かな

窓枠に小さき蜂の巣見つけたり

十薬の花を机の隅に活け

夫と観る録画の映画夏の夜

梅雨明けの窓に朝日の強きかな

裏山の笹百合を見に今朝も行く

ふるさとに赤翡翠の声澄みて

また一つ鐘の鳴りけり夏木立

青桐を打ち傘を打ち通り雨

夕風の街から川の土手筋に

万緑や被爆後生くる吾八十

大畑恵

暁子

すみれ

訳もなく開けて眺むる冷蔵庫
鮎の腸旨しと食ぶる歳となり
洗ひ髪タオルに巻いて星を見る
黒南風や乱れし髪に手櫛入れ
やめ時を逃してをりぬ草むしり
自転車のまま緑蔭に休みをり
夏帽子片手で押さへ海へ向く
螢狩小声の列の続きをり
船に係ひ船を追ひ越すあごの群
橋渡る日傘の列に加はりぬ

知佳子

帰り際にバケツの蟬蚪を逃がしけり
幼子と電線の燕数へけり
生家へと母と帰るや山うつぎ
母の部屋に生けし紫陽花まだ綺麗
朝起きて青梅の香のリビングよ
青田風五十年ぶり母校訪ふ
庭の垣に昨日のプール干してあり
幼子と二人でくぐる茅の輪かな
朝早く帰省子送るホームまで
じやがいもをしやがんで揺つて親子かな

ちどり

蒲公英の一輪咲いて雨宿り
池の面に風のごとくにつばくらめ
時折の風の涼しき揚羽蝶
四葩咲く夫の見舞を目課とし
振花の立ち上がりたる雨上り
少年の一人と揺るる捕虫網
炎天の小さき陰に身を入れて
告げられし夫の寿命や雲の峰
紫の夕焼雲を見てひとり
蜻蛉の影の行つたり来たりかな

辻純江

通草咲く此処は私の住み処なり

誕生日祝ふサラダに薔薇を添へ

八十寿なり涼しく風の吹くひと日

夏木立駆け来る犬を抱きしむる

病状に一喜一憂夏の草

炎天の静まる道を歩きけり

浜木綿の向うに瀬戸の海を見て

夕涼の竹藪の坂下りけり

仕事終へ帰りし子の背汗滲む

縁に掛け一人見てゐる夏の月

雲雀

炎天や牛が水飲む喉の皮

毛虫踏むまだ新品の草履でも

幾筋の雲を上げゆく夏の山

人間の前に手をつく鬼やんま

登山口車は多し人はなし

前にいつ誰がどこまで登山道

落ちてゐる蝉羽ばたいてみせる道

郷土富士流行り廃りの登山宿

手を入れて透明触る岩清水

苔清水ただただ時も水の音

ふじ女

円に巻き付いてゐる鉄線花

呉線の曲がるところの玄葵

はうたるの乾きし句祖母の家

夏つばき一夜の明けて落ちにけり

神の山滴り球見駆け上がる

尾根沿ひに風車の並ぶ青岬

海霧はれて海峡通る外国船

白餅の君はいつもの場所に待ち

雨粒の形のピラス浴衣の子

祭果て露店の匂残る朝

松田裕子

夕まくる傘持ち行けと母の声
階よりヴァイオリンの音夏の宵
自家製のゼリーに銀の匙を入れ
庭仕事旁うて出す氷菓子
風止みて斑猫跳ねる日中かな
石垣の高き屋敷に木槿咲く
出されたるアイスコーヒー飲み干せり
青柿を拾うてきたる幼き子
雨止みし朝夏霧の流れたる
日陰へとまづ促して演説す

村上正人

新緑に歌声響く保育園
薰風や日の斑揺れたる乳母車
青も黄も笈を片手に実梅匂ぐ
朝市に氏子持ち寄る夏野菜
遠雷や不吉なことが起きさうな
星空に茅の輪の匂ふ社かな
七月の色となりけり瀬戸の海
浜辺より戻つて来たる浮き輪かな
後輩に譲る歳時記令歡の花
家居してカウチに聞ける遠花火

森口良樹

木苺をひとつ摘まみて先をゆく
林道の紫陽花に沿ひ歩きけり
じつとして鰯の忙しき目高かな
青紫蘇の畑に下りて香をかぎぬ
青柿の見るたびに膨らんでをり
背表紙を眺め涼しき本屋かな
百日紅波止への道に咲いてをり
漁火の遠くに見ゆる家路かな
木槿咲く垣根の横を買ひ物に

秋楡

夏旺んゴングの前のスタジアム

風蘭や軒をくぐりて香り受く

オカリナの慈雨に消えゆく演奏会

捕虫網担ぎ真つ直ぐ土手の道

鳴滝へ鉄漿蜻蛉消えゆけり

青田縫ふ一輛に乗り里帰り

ここからは川の名変はる夏の郷

吊り革の揺れて涼しき終電車

魚煮る夫の前掛夏深し

地図広げ登つてみたき夏の山

父の日をケーキで祝ふ二人かな

起き抜けの朝一番のバナナかな

夏の朝冷したトマト切り分ける

夏の午後気象館への道を聞く

炎天を目的地まで歩きけり

世がまれて餃子を作る夏の夕

原爆忌祖父の骨なし何もなし

帰りにはまた来るからと墓参

頬白の鳴く姿あり木の天辺

豪雨にも聞こえてゐたる蛙かな

採る人のなく梅の実の落ちてをり

青梅を漬けて日々変化見る

葛餅や雨音のなか本を読み

あめんぼうどこから来しか仕草見る

七夕に子の退院と書きにけり

虹の出で君と見たさに車停め

古簾揺らして風の入りにけり

今井淳子

土肥律子

なつ

梅雨晴の浅瀬に残る足の跡

遺跡へと続く田んぼの古代蓮

蜘蛛の囀の大きく揺るる風の道

山の宿ゆつくり暮るる晩夏かな

蔭のなき広き野原に蟋蟀追ふ

帰り来ぬ叔父に芋炊く原爆忌

めでたさにやをら始まる島踊り

回廊の奥の静けさ新松子

稲雀屋根に散れどもまた戻り

山野ウタ

空中にドローンぼつり夕焼空

飼い主のリード引く犬夏の昼

夏木立ひとりて並ぶ遊園地

ふつと沸き立つジャムや日輪草

海月群れつかみどころのなき同期

幼子の肩にもたれて遠花火

等分に瓜を割りたるテント基地

水槽の海月蛍光灯の青

竹田千絃

虫干や二階の窓を開け放ち

忌日かな曝書してゐる夫の部屋

裏庭に小粒の枇杷のたわわなり

枇杷熟れて静まり返る一軒家

大南風母と見下ろす瀬戸の海

日本海見下ろすリフト雲の峰

大原良子

畑より真つ赤なトマト皿に盛る

友達と蝉鳴く道を散歩する

兜虫孫の喜ぶ顔浮かぶ

夕立や空き家の軒に雨宿り

裏庭にコスモスの苗植急にけり

手を伸ばし無花果三つ櫛ぎにけり

河原静子

旧宅の枝伸ばしたる百日紅

アガパンサス微かに揺らし夏の雨

マンションの窓閉めてなほ蝉の声

水鉄砲空に向かひて放ちたり

手花火の火の消えぬ間にもう一つ

観覧車の小窓より入る風涼し

撫子

黒揚羽我より先に道をゆく

里帰り車窓に見ゆる夏木立

鶯が二羽広き青田に舞ひ降るる

目の覚めし赤子に吹いて青田風

伯母の家百日紅咲く塀の中

その光も夾竹桃の咲いてをり

美耶

通勤の道に今朝咲き百日草

濁り水青鷺ゆつくり着水す

白鷺の親と子の来る河口かな

引き潮の水際に夏鴨集まりぬ

御座船の太鼓聞こゆる管絃祭

上島康子

通るたび見上ぐる塀の花石榴

さくらんぼコップに種を受けとめて

夏萩の昨日までは青くして

蚕豆の茹で上がり待つ父の顔

蟬の殻枝の一つを抱かせたり

みさ子

山の寺夏草取りに追はれけり

山の寺清水を汲んで客に出し

日盛の人影のなき山の里

牧草の露の光れる朝の窓

紀英子

芝棟に夏蝶高く飛びにけり

友人に見せたき烏瓜の花

凌霄の花を直指して訪ねけり

蟬しぐれ置き配で来る富士の水

熊谷ゆり子

梔子の花に園児のふれてゆく

紫陽花の紅の濃き厨窓

木苺の熟れ始めたり子の集ふ

熊蟬の網戸をつかみ羽化を終ふ

高嶋朝代

うしろ髪短く切りし炎暑かな

しみじみと亡き人思ふ夏料理

蟬の声頬杖ついて聞いてをり

広島忌皆で折り鶴持ち寄りて

やす保

宮島の路地裏を行く梅雨晴間

梅雨明けてハーモニカ吹く米寿かな

夏の宵多弁な友の喉仏

桜陽

鮎届き夕餉を待ちて一尾焼く

鮎を食ひ地酒を酌めば旅心地

日照雨して螢袋の鳴ることし

志路猿

叱られて後を追ふ子や夏椿

炎天の夜には細き月上がる

ゆつくりと朝の廊下の蛾を跨ぐ

高梨英子

日陰選り街を歩いて夏の午後

山の上入道雲がそれぞれに

祇園会の笛鉦太鼓の音合せ

民

青梅に係る手仕事母想ふ

紅蓮の迎へてくるる帰り道

路地を吹く風にしばらく汗拭ふ

古川廣子

寄せ植ゑの紅黄草の確と立ち

さくらんぼ爪の形は母親似

汗疹の子砂場でずつと絵を描き

山崎桂子

夏海に入りて踏みたる浜の砂

両足で砂をつかみて夏の浜

今生のこの身でくぐる茅の輪かな

弥生

令和七年六月度作品集より

あざみ 私の選んだ十句

方墳へと円墳へと夏の霧	佐保光俊
近寄ればすぐに親の来る鴉の子	高尾ひとみ
合歓の花今日も歩ける裏通り	亜矢
音させて山鳩歩く夏落葉	暁子
我が植田受くる若者決まりたる	すみれ
青べらが入荷したよと店の人	知佳子
田植終へみんな写真撮りにけり	ちどり
紫陽花の道に町費を集め行く	雲雀
その遺骨身元を捜し沖縄忌	村上正人
呑み助の揃つてたのむ冷奴	高梨英子

ちどり 私の選んだ十句

青嵐の剣を越えれば伯耆富士	佐保光俊
四十雀けふは窓辺に声のして	高尾ひとみ
子を見送りひとつづつ見るクレチマス	亜矢
万緑へ歌のやうなる瀬音かな	井藤希
コーラスの仲間と見上ぐ夏の空	大畑恵
卯月の月見てゐる横に夫座る	すみれ
月涼し雁木に小舟あたる音	松田裕子
梅雨暗間濃きコーヒーを啜りたる	村上正人
アマリリス夏の夕方の林しくて	高梨英子
桐の花 齢重ねて母の歳	みさ子